

六朝志怪小説に見られる死後の世界

はじめに

六朝期に数多く編纂された志怪小説集は、干宝の『搜神記』序文からも見て取れるように、歴史の補遺としての性格を持っていた。当然そこに収められた説話は、当時の民間伝承も数多く含み、聞き書きとして記録されていたと考えられる。また、その歴史の補遺としての性質から、編者による意図的な創作は加えられていないように思われる。

このような性格を持つ志怪小説集の中で、数多く記録されている話の一つに、「死」がある。本論考では、六朝の代表的説話集である『搜神記』『搜神後記』『異苑』、さらに魯迅輯『古小説鈞沈』をテキストに、当時の人々が死後の世界をどうとらえていたかについて、地理的分布と歴史的変遷の二点に注目し、考察を加えてみたい。

それでは、まず最初に六朝志怪以前に、死後の世界がどのように考えられていたか、整理しておこう。古楽府の中に、死後の世界を描いたものがいくつか存在する。例えば、

『孤児行』に次のような句がある。

居生不楽、不如早去、下従地下黄泉。(居生楽しからざれば、如かず早く去りて、下のかた地下の黄泉に従はんには)

この中で、死後の世界として意識されているのは、地下にある「黄泉」という場所である。同様に、古楽府『焦仲卿妻』にもこの「黄泉」という場所がうたわれる。

卿当日勝貴、吾独向黄泉。(卿は当に日に勝れ貴かるべし、吾は独り黄泉に向はん)

黄泉不相見、忽違今日言。(黄泉にて相見えずとならば、忽ち今日の言に違ふべし)

これらの楽府から、当時の人々が死後の世界として、地下の「黄泉」という場所を意識していたことがうかがえる。

地下ではなく、地上にそのような世界があるという考え方もまた存在していたようである。同じく古楽府『蒿里曲』の中に、

高西成介

蒿里誰家地、聚斂魂魄無賢愚、鬼伯一何相催促、人命不得少踟躕。(蒿里は誰が家の地ぞ、魂魄を聚斂して賢愚無し、鬼伯一に何ぞ相催促するや、人命は少しくも踟躕するを得ず)

とあるように、「蒿里」という場所も、死者の行き先として考えられていたようである。

また、『後漢書』卷八十二の方術伝下に次のような記述が見られる。

許曼者、汝南平輿之人也。祖父峻、字季山、善卜占之術、多有顯驗。時人方之前世京房。自云、少嘗篤病、三年不愈。乃謁太山請命。行遇道士張巨君、授以方術。所著易林、至今行於世。(許曼は、汝南平輿の人なり。祖父峻、字は季山、卜占の術を善くし、多く顯驗有り。時人之を前世の京房に方ぶ。自ら云ふ、少きとき嘗て病を篤くし、三年にして愈えず。乃ち太山に謁し命を請ふ。行きて道士張巨君に遇ひ、授くるに方術を以てす。著わす所の易林、今に至るも世に行はる)

また、同じく『後漢書』卷九十の烏桓伝に

如中国人死者魂神歸岱山也。(中国人の死者の魂神

岱山に歸するが如きなり)

とある。これら『後漢書』の記述から、後漢の頃、既に死者の行き先として、泰山を想定する考え方があったことがうかがえる。

一方、死者が天に昇るといふ考え方もあったようである。『楚辞』大招の、

魂乎归来、鳳凰翔只。(魂よ帰り来たれ、鳳凰翔く)

という句は、死者の魂が神鳥である鳳凰に導かれ天に行くことを意味する^①。また、馬王堆漢墓から出土した帛画には、昇仙図が描かれており、死者が崑崙山に昇仙するといふ考え方があったことが、うかがえる^②。

このように、六朝以前には様々な場所が死者の行き先として想定されていたのであるが、それでは、六朝の志怪小説においては、いかなる場所が死者の行き先として考えられていたのであろうか。

志怪に見られる死後の世界の話から、一体我々は何を讀み取ることができるか、このことに関して、従来様々な論考が重ねられてきた。例えば、前野直彬氏は、六朝志怪小説の冥界訪問譚に関して、次のように述べる^③。

六朝の小説は珍しい、ふしぎな話への驚異や好奇心、または素朴な疑問から出発したと言えよう。それは中国人の「原始的」な信仰に根ざしている。その信仰の色があせ始めたとき、話はしだいに興味本位なものへと移っていった。人間界の事象からの類推や想像が遠慮無く神秘の世界へ割りこんで、話をおもしろくしてゆくのであった。

しかし冥界遊行の話には、その神秘性の崩壊する一

歩手前のところで、強力な支柱が入った。仏教の信徒たちは冥界を再組織して、そこを遊行して帰った人物を「英雄」ではなく、来世への恐怖におののく一人の人間として表現することになった。想像力は敬虔な信仰に裏うちされて、方向を一つに―因果応報の爽わぬことにと、みずからを規制してしまつたのである。

ここで前野氏は、六朝の冥界訪問譚を文学の流れの面から、考察されている。しかし、様々な冥界訪問譚を単線的な発展経路としてとらえられているのは、不満が残る。志怪において語られる死者の行き先は、大きく分けて次の三つである。

(一) 墓

(二) 天

(三) 泰山

この他にも、従来の「黄泉」「蒿里」を描いたものもあるが、数はわずかであり、志怪小説における死後の世界は、この三つが中心である。

死後の世界が、当時天や泰山など一つに収斂されることなく語られていたのには、何らかの理由があるはずである。本論稿では、特に地理的分布という点に注目し、あわせて歴史の変遷をも視野に入れながら、六朝志怪小説の死後の世界に関する説話を論じていくことにする。

一 泰山と天

本章では、まず泰山と天に注目してみたい。なぜなら、この二つの世界は、六朝の志怪小説において、明確な死後の世界として構築されているからである。

まず、泰山を死後の行き先と想定した説話である。『列異伝』^④23に次のような話がある。

◎領軍將軍蔣濟の妻は、夢で亡き息子を見た。彼が語るには、今地下の冥土におり、泰山府の下役人となり苦しんでいる、今太廟の西にいる孫阿はいずれ召されて泰山令となるので、彼に私の配置替えを頼んでくれないか、ということであった。蔣濟はその話を信じないが、妻に請われて人を太廟にやってみると、はたしてそこに孫阿という人物がいた。そこで、孫阿に夢の出来事を語ると、彼は泰山令になることを喜び、蔣濟の息子の頼みを受け入れる。そして、蔣濟の息子がいったとおりの時間に、死ぬ。一月あまりして、再び蔣濟の息子が母の夢に現れて、転任して録事となった、と語った。(要約)

この説話において、蔣生の息子は、母の夢で次のように語る。

死生異路。我生時為卿相子孫。今在地下為泰山伍伯、憔悴困辱不可復言。今太廟西謳士孫阿今見召為泰山令。

願母為白侯、属阿、令転我得楽処。(死生は路を異にす。我生まれし時は卿相の子孫たり。今地下に在りて泰山の伍伯と為り、憔悴困辱は復た言ふべからず。今太廟の西の誼士の孫阿は今に召されて泰山の令と為る。願はくは母 為に侯に白して、阿に属み、我を転じて楽処を得さしめよ。)

このような表現からも、蔣済の息子は死後泰山に行ったことがわかるだろう。

このように、死者が泰山へ赴くという設定の説話は、志怪小説集には八話を数えることができる。次の『搜神記』⁷⁴の胡母班の話も泰山を描く説話の代表的なものである。

◎胡母班が、かつて泰山のかたわらを通りかかったところ、泰山府君に呼ばれ、府君の宮殿に行く。彼はそこで手紙を娘婿の河伯に届けてもらえないか、と頼まれる。胡母班はその頼みを受け入れ、手紙を河伯のもとに届ける。数年後、再び泰山のふもとを通りかかった胡母班は、報告のため府君に会う。廁に立った胡母班は、そこで首かせをつけて労役に服している父を見る。父は、胡母班にこの労役を免れ、土地神になれるよう、府君に口をきいてくれ、と頼む。府君は「生と死は世界が異なっており、お互い近づいてはいけない」というが、班がしきりに請うのでこれを許した。一年あまりして、胡母班の子どもが次々に死んでしま

う。班は、また泰山に行き府君に哀れみを請う。府君は班の父を召還し、彼に問うたところ、孫たちを呼び寄せた、と答えた。そこで、府君は役職を交代させた。これ以降、子どもはつつがなく育った。(要約)

この説話においても、胡母班は、泰山の府君のもとで、自分の死んだ父親と出会っており、泰山が死者の行き先として設定されていることがわかる。他にも、

◎臨淄県の蔡支が道に迷い、泰山府君の所に行く。外孫の天帝に手紙を渡すことを依頼される。【吾太山神也】(『列異伝』41)

◎南陽郡の賈偶が病を得て死に、吏に連れられて泰山に行く。【時有史、将詣太山】(『搜神記』361)

◎沛国の張伯遠が十歳の時、病で死んだ。泰山のふもとで十人あまりの子供を見た。生き返って後年泰山に行ってみると、その時見た光景のようであった。【見泰山下有十余小兒】(『甄異伝』11)

◎桓哲が豫章郡にいたるとき、夢に兵卒となって太守梅元龍が泰山府君となるのを迎えた。梅元龍は夢に桓哲が、卒となって自分を迎えにくるのを見た。二人はともに死んだ。【迎卿来作泰山府君】(『搜神後記』36)

◎机を作るのが巧みであった歴陽郡の石秀之は太山府君に召され、劉政を連れに来た役人に推薦したところ、彼は死んだ。【太山府君相召】(『異苑』207)

◎北府の索盧貞は、寿命がきていないにもかかわらず、上役が官吏を必要としているため、冥土に呼ばれるが、別の人を推薦して帰る。途中かつての隣人が、泰山の門主となつているのに会う。そして彼から彼の妻に伝言を頼まれる。【為太山門主】（『幽明録』123）
 といった説話がある。

また、仏教的な色彩の濃い説話の中にも、泰山が取り込まれ語られていく。例えば次のような話である。

◎巴丘県の巫師舒礼が、晋の永昌元年、病で死ぬ。土地神が、彼を泰山に護送しようとした。舒礼は最初、仏教徒と間違えられ、福舎に連れていかれる。しかし、舒礼が生前淫祠をつかさどる巫師であつたことが判明し、改めて泰山に送られ、責め苦を受ける。寿命簿を点検した結果、寿命が尽きていないことがわかり、再び殺生と淫祠を行つてはならぬと、府君より命ぜられ、生き返る。舒礼は二度と巫師の仕事をするこゝろはなかつた。（要約）（『幽明録』82）

この説話では、現世で巫師という淫祀をつかさどる舒礼という人物が、土地神に連れられて泰山に行き、地獄の責め苦を受ける。仏教の側から民間信仰を攻撃するという意図のもとで作られたと思われるものであるが、ここでも死者の行き先は泰山である。以上の説話において、その舞台となつた場所を挙げると次のようになる。

臨淄県（『列異伝』41）

泰山（『搜神記』74）

南陽郡（『搜神記』361）

沛国（『甄異伝』11）

豫章郡（『搜神後記』36）

歴陽郡（『異苑』207）

巴丘県（『幽明録』82）

京口県（『幽明録』123）

次に死後天に昇ぼる説話について考察する。志怪小説集の中では、この型は十六話を数えることができる。まず、『搜神記』260の説話を挙げてみよう。

◎呉の時、嘉興の徐伯始は病氣になり、道士呂石に神座をまつらせた。石を手伝わせるため二人の弟子も呼び寄せた。石が昼寝をしていたところ、夢に天に上り、北斗門のところを鞍を外した馬三頭をみた。石はそこで自分達が死ぬのを知り、仕事をやめ家人と別れるため、その地を去つた。一日おいて、三人は同時に死んだ。（要約）

この説話は、呂石が、夢に天の北斗門に昇ることで、自分の死期を悟るといふものである。ここでは、死後の行き先として天が想定されている。他にも次の十五話がそうである。

◎会稽郡の賀瑀が死んで、役人に連れられ天に昇る。

- 【吏人將上天】(『搜神記』364)
- ◎吳興郡長城県の戴洋が死んで、天に昇り酒蔵吏という役職につく。【天使其為酒蔵吏】(『搜神記』365)
- ◎臨海郡松陽県の柳榮が死んで、天の北斗門に昇る。【上天北斗門下】(『搜神記』366)
- ◎楽安県の章沈が、死んで、天に昇る。【被録到天曹】(『甄異伝』9)
- ◎吳の時、王姥がかつて九歳の時死に、北斗君にまみえる。【挾將飛見北斗君】(『幽明録』57)
- ◎晋の元帝の時、甲という人物が、寿命が尽きていないのに天に召される。【見人將上天詣司命】(『幽明録』70)
- ◎蔡謨は、新たに死者の出た家から、老婆が天に昇っていくのを見た。【飄然升天】(『幽明録』77)
- ◎桓玄の時、疫病で死んだ牛の肉を食べた人が、天上に連れていかれようとしていた。しかし、高貴な人物の言葉によって、生き返ることができた。【將至天上】(『幽明録』116)
- ◎曲阿県で、一人が病で死に、天上で父にあり。【見父於天上】(『幽明録』240)
- ◎王文帝が広陵郡を治めていたとき、鬼が現れ天上の官に召すことを告げる。王は病で死んだ。【今所作是天上官也】(『幽明録』157)

- ◎東萊郡の王明兒、家は江西地方にあったが、死んで一年後天の役所の許可を得て、しばらく家に帰ってくる。【天曹許以暫帰】(『幽明録』215)
- ◎衡陽太守の王矩は、長沙郡で知人に会う。彼は鬼で、天の使いとして迎えに来たと告げる。数ヶ月後、彼の渡した手紙を見ると、それは左司命主簿に任ずというものであった。王矩は病で死んだ。【天上京兆、身是鬼】(『幽明録』219)
- ◎豫章郡の胡庇子が武昌郡の丞であったころ、鬼による災いが起き、天上で御史となった知人の使いが仏道に帰依するよう伝えに現れる。【陶令処福地、作天上御史】(『述異記』50)
- ◎陶継之は、秣陵県の県令であったとき、無実の楽人を処罰してしまふ。ほどなくして、楽人が夢にあらわれ、天帝に訴えた言い分が認められたから迎えにきたと告げる。【訴天得理】(『述異記』53)
- ◎烏程県の丘友は、死んで天に連れていかれ、一日半して再び生き返り、見てきたことを話した。【將去上天】(『録異伝』16)
- これらの、説話の舞台となるところを挙げると次のようになる。
- 嘉興県(『搜神記』260)
- 会稽郡(『搜神記』364)



図1 死後泰山へ行く説話と、天へ行く説話の分布

呉興郡の長城県(『搜神記』365)
 臨海郡の松陽県(『搜神記』366)
 臨海郡の樂安県(『甄異伝』9)
 長沙郡(『幽明録』219)
 曲阿県(『幽明録』240)
 武昌郡(『述異記』50)
 秣陵県(『述異記』53)
 烏程県(『録異伝』16)

以上のように、泰山と天にいく説話の舞台となった地名を列挙してみると、一つのことには気がつく。すなわち、泰山を死後の世界とするのは、北の地方で、天を死後の世界とするのは、南の地方だということである。これを、地図に表わすと、図1のようになる。

この地図を見れば、二つの死後の世界の境界が、淮水にあることは明らかであろう。すなわち、淮水以北では、死後の世界として泰山が語られており、淮水以南では死後の世界として天が語られるのである。これら二つの死後の世界は、六朝期において、地理的に異なった地方で分布していたのである。

このことは、六朝期において、天と泰山という二つの異なる死後の世界が語られていたのは、伝承されていた地方の違いによることを意味する。つまり、六朝においては、死に対する異なった思考様式を持つ二つの地域があったの

である。そして、それは二つの文化圏の存在を意味し、その境界が淮水であったことも、この分布図からも明らかである。

また、死後の世界には官僚組織が存在していた。この官僚組織もまた、泰山が語られる説話と、天が語られる説話とでは、微妙に異なる。

天の官僚組織を描いた六朝初期の説話には、次のような記述が見られる。

吏人將上天、見官府。(『搜神記』364)

死時、天使其為酒藏吏。(『搜神記』365)

上天北斗門下、卒見人縛張梯。(『搜神記』366)

『搜神記』364の「官府」という言葉から、天には役所があることがわかるし、「酒藏吏」「卒」という言葉から、天には官僚がいたであろうことはうかがえる。しかし、泰山にある官僚組織と比較すると、どうであろうか。先の蔣済の息子の言葉をもう一度例としてあげてみる。

今在地下為泰山伍伯、憔悴困辱不可復言。今太廟西誼士孫阿今見召為泰山令。願母為白侯、屬阿、令轉我得樂処。(『列異伝』23)

ここでは、先の天における官僚組織よりも、さらに厳格で具体的な組織の図が読みとれるであろう。これは、天の官僚組織が、あくまでそこに組織があるということがうかがえるだけの比較的簡単なものであったのとは異なる。他の

例も挙げてみよう。

臨淄蔡支者、為県吏、会奉書謁太守、忽迷路、至岱宗山下。見如城廓、遂入致書。見一官、儀衛甚嚴、具如太守。(臨淄の蔡支は、県吏為り、会たま書を奉じて太守に謁へんとするに、忽ち路に迷ひ、岱宗山の下に至る。城廓の如きを見るに、遂に入りて書を致す。一官を見るに、儀衛甚だ嚴かにして、具ふること太守の如し。)(『列異伝』41)

曾至泰山之側、忽于樹間逢一絳衣騶。呼班云、「泰山府君召。」班驚愕、逡巡未答。復有一騶出呼之。遂隨行數十步、騶請班暫瞑。少頃、便見宮室威儀甚嚴。班乃入閣拜謁。(曾て泰山の側らに至り、忽ち樹間に一絳衣の騶に逢ふ。班を呼びて云ふ、「泰山府君召せり」と。班驚愕して、逡巡し未だ答へず。復た一騶の出でて之を呼ぶ有り。遂に隨ひ行くこと数十歩、騶班に暫く瞑せんことを請ふ。少頃にして、便ち宮室を見るに威儀甚だ嚴かなり。班乃ち閣に入りて拜謁す。)(『搜神記』74)

時有吏、將詣太山。司命閱簿、謂吏曰、「当召某郡文合、何以召此人。可速遣之」(時に吏有りて、將めて太山に詣る。司命簿を閲して、吏に謂ひて曰く、「当に某郡の文合を召すべきに、何を以て此の人を召す。速に之を遣る可し」と。)(『搜神記』361)

これらも同様に、天の説話に比較すると、より厳密で具体的にであることがわかるだろう。

以上のようなことから、天の説話においては、その背景に天に対する素朴な興味と驚きがあり、そのことを語るのに興味の主眼があった、といえるのではないだろうか。その結果、現実を反映させるような官僚組織は、その説話の中に明確に持ち込まれることがなかった。一方、泰山に関する説話では、興味の対象が、泰山そのものよりも、そこにあるであろう冥界であった。結果、その世界を説明するため、現実の世界を反映させたような、官僚組織をそこに持ち込み、一つの世界をそこに構築していったのである。

このような官僚組織の語られ方から見ても、淮水以北と以南では思考様式が異なっていたことがわかる。

しかし、一方で図1を見てみると、「死後昇天」の説話が、淮水を越えて北に見られないのに対して、「死後泰山へ」という説話は、淮水を越えたところに数例見ることができる。つまり、建康付近に三例（歴陽郡を舞台とした『異苑』207、巴丘県を舞台とした『幽明録』82と、京口県を舞台とした『幽明録』123）の各説話である。これは、一体何を意味しているのだろうか。

この意味を探るためには、天と泰山、この二つの世界を死後の世界と考える考え方が、淮水を境に交わることなく、並存した形で語られ続けていったのではなく、「泰山」を

死後の世界と想定する考え方が、北から南へと流入していったという、歴史の変遷の視点からの考察が必要となる。

二 歴史の変遷の原因

死後の世界を、歴史の変遷という視点から見ると、まず第一点として、仏教の広がりということが考えられる。いまままで多くの研究者が指摘してきたように、泰山信仰は仏教の中に吸収されており、その過程において、従来の民間信仰的な色合の濃いものから、仏教喧伝を意識して創りだされる物語が成立してくる。例えば「趙泰の地獄巡り」として知られる説話では、趙泰は死後泰山府君のもとに赴き、その後地獄巡りを行なう。この物語は、泰山府君が仏の下に位置付けられているという点から考えても、民間伝承というよりも、明らかに仏教側の創作であるといえる。語られる舞台はどこかはっきりしないが、趙泰は清河（河北省）の貝邱の人と記されているので、恐らくは北方系の物語であろう。

一方、淮水以南の話と思われるもので、仏教の影響を色濃く受けている説話も存在する。それが、先に便概を記した、『幽明録』82の説話である。

この説話では、まず舒礼は、仏教徒と間違えられ、福舎に送られる。その描写は次のようなものである。

路過冥司福舎前。土地神問吏、「此是何等舎。」吏曰、

「道人舎。」土地神曰、「是人亦道人。」便以相付。礼入門、見数千間瓦屋。皆懸竹簾、自然牀榻、男女異処。有誦經者、唄偈者、自然飲食者。快樂不可言。（路に冥司の福舎の前を過る。土地神 吏に問ふ、「此れは是れ何等の舎か」と。吏曰く、「道人の舎なり」と。土地神曰く、「是の人も亦道人なり」と。便ち以て相付す。礼 門に入り、数千間の瓦屋を見る。皆竹簾を懸け、自然に牀榻し、男女 処を異にす。経を誦ふる者、偈を唄する者、自然に飲食する者有り。快樂言ふべからず。）

しかし、仏教徒ではないと判明した舒礼は、府君のもとに連れて行かれる。

太山府君問礼、「卿在世間、皆何所為。」礼曰、「事三万六千神、為人解除祠祀。或殺牛犢猪羊鷄鴨。」府君曰、「汝佞神殺生。其罪忤上熱熬。」（太山府君 礼に問ふ、「卿 世間に在りて、皆何の為す所ぞ」と。礼 曰く、「三万六千神に事へ、人の為に解除祠祀す。或いは牛犢猪羊鷄鴨を殺す」と。府君曰く、「汝 神に佞りて殺生す。其の罪忤に熱熬に上ぼるべし」と。）

この描写からも明らかかなように、巫者であった舒礼は、責め苦を受けることを府君から告げられるのである。仏教を信じるものを優遇し、そうでないものを冷遇するこれらの描写からも、この説話は仏教喧伝を目的として創作された

ものである、と考えられる。

異界に行つた舒礼は、淮水以南の地方の出身者である。ついで時代が下り『冥祥記』のような完全な仏教説話集となると、昇天の考え方は仏教の三界の考え方に飲み込まれ、泰山の考え方も、結局府君という官職のみをその痕跡としてとどめるだけになってしまふのである。これについては、次章で詳しく述べる。

第二に、人の移動がその原因として考えられる。

歴陽石秀之、倏有一人著平巾袴褶、語之云、聞君巧倅班匠、刻几尤妙、太山府君相召。秀之自陳云、劉政能造。其人乃去、数旬而劉殞。石氏猶存。劉作几有名、遂以致斃。（歴陽の石秀之、倏ち一人有り平巾袴褶を著け、語りて云ふ、君の巧みなること班匠に伴しく、几を刻むこと尤だ妙なるを聞く。太山府君 相召すと。秀之自ら陳べて云ふ、劉政能く造ると。其の人乃ち去る。数旬して劉 殞す。石氏猶ほ存す。劉 几を作るに名有り、遂に以て斃を致す。）（『異苑』207）

この説話は、仏教喧伝の話ではない。

しかし、泰山を死後の世界としながら、登場人物は淮水以南の歴陽郡の出身者である。このことから考えておそらく、これは淮水以南の地方で語られていたものであろう。が、仏教の広まりという第一の理由だけでは、どうして南の地方で泰山が語られるのか、うまく説明がつかず、第二

の理由を考えなくてはならない。それには、次の『幽明録』124のような説話が一つのヒントを与えてくれる。

◎琅邪郡の人で王某という人がいた。錢塘県に住んでいた。妻の朱氏が亡くなり、子供二人が残される。王もまた、その時に突然死んだ。そして七日後生き返って次のようなことを語った。

役人に捕らえられ、宮殿のようなところに連れていかれた。体が大きく雲気のような衣服を着た人物に「妻は既になく、子供は幼いのです」と訴えると、特別に三十年の期間を与えてくれ、送り返された。

王ははたして三十年後死んだ。(要約)

この説話は、明確に死後どのような世界に行ったかは書かれていない。しかし、死後の世界の描写から、その推測は可能である。つまり、

初死時、有二十余人。皆烏衣見録、録去、到朱門白壁、状如宮殿。吏朱衣紫帶、玄冠介幘、或所被著悉珠玉相連結、非世中儀服、復前見一人長大、所著衣状如雲氣。(初め死せし時、二十余人有り。皆烏衣に録せらる。吏録し去られて、朱門白壁、状は宮殿の如きに到る。吏

朱衣紫帶、玄冠介幘にして、或いは被著する所悉く珠玉相連結し、世中の儀服に非ず、復た前むに一人の長大にして、著る所の衣状は雲気の如きを見る。)

という表現である。この部分は次の、

……忽迷路、至岱宗山下。見如城廓、遂入致書。見一官、儀衛甚嚴、具如太守…… (忽ち路に迷ひ、岱宗山の下に至る。城廓の如きを見るに、遂に入りて書を致す。一官を見るに、儀衛甚だ嚴かにして、具ふるごと太守の如し) (『列異伝』41)

……少頃、便見宮室威儀甚嚴。班乃入閣拜謁…… (少頃にして、便ち宮室を見るに威儀甚だ嚴かなり。班乃ち閣に入りて拜謁す) (『搜神記』71)

という泰山の描写と酷似している。ということは、『幽明録』124の説話は、泰山に行ったと考えることができよう。舞台は、錢塘県(会稽郡呉興県の近く)で、死後天に行くと考えられていた地域、そして主人公は琅邪郡の出身、つまり死後泰山に行くと考えていた地域の出身である。ここから、もともと北方の出身者が、「死後泰山へ」という考え方を持って南の地方へ移動をしたことを、読み取ることが可能である。

このような、北の死後の世界像を持った人間が南に移住していくということが、このころ頻繁に起こっていたと思われる。この、人の移動が、一番最初に例に挙げた『異苑』207のような、南が舞台となりながら、泰山に死者が行く説話を語らせるのである。

以上述べてきたように、仏教の広がりや人間の移動、この二つの要因によって、南でも北方的な説話が語られ、同

時に南の説話の特徴であった天そのものが、それに影響されて変化していく。

また、第一章で述べた官僚組織の描写においても、時代が下がると、天と泰山の二つの世界の差が、あいまいになった説話が現れている。

見人將上天詣司命。司命更推校、算歷未盡、不応枉召。主者發遣令還。甲尤脚痛、不能行、無縁得帰。(人の將ゐて天に上ぼり司命に詣るを見る。司命更に推校するに、算歷未だ尽きず、応に枉げて召すべからず。主者發遣し還らしむ。甲 尤も脚痛く、行くこと能はず、縁りて帰るを得ること無し。)(『幽明録』70)

被録到天曹。天曹主是其外兄、断理得免。初到時、有少年女子、同被録送、立住門外。女子見沈事散、知有力助、因泣涕、脱金釧一双及臂上雜宝、託沈与主者、求見救濟。沈即為請之、並進釧物。良久出、語沈已論、秋英亦同遣去、秋英即此女之名也。(録せられ天曹に到る。天曹の主は是れ其の外兄、断理して免るを得。初め到りし時、少年の女子有り、同じく録送せられ、立ちて門外に住まる。女子 沈の事散ずるを見て、力もて助かる有るを知り、因りて泣涕し、金釧一双及び臂上の雜宝を脱し、沈に託して主者に与へ、救濟せられんことを求む。沈即ち為に之に請ひ、並びに釧物を進む。良や久しうして出で、沈に已に論ぜられ、秋英

も亦同じく去らしむと語る、秋英は即ち此の女の名なり。)(『異苑』321)

この二つの説話は、死者が天に赴く説話である。しかし、天の官僚組織の描写は、ともに従来 of 描写と比べて具体的で細かくなっている。この舞台を天から泰山に変えても見分けがつかないほど、その描写は似通っていると言えよう。これらの例からわかるように、描かれる世界は天であるにかかわらず、その描写は泰山説話とかわらない。これもまた、北の説話であった泰山説話が、南へ流入し、南の天の説話に影響を与えたということができるだろう。

三 『冥祥記』における天と泰山

齊の時代に編まれた『冥祥記』は、仏教喧伝という明らかな意図のもと編纂されており、その点で他の『搜神記』などの志怪小説集と異なっている。またその題名からも明らかのように、人の死にかかわるものが、その中に数多く収められている。全一三一中、死後の行き先に関して述べるものも、二九話見られる。

しかし、明確に死者の行き先を語るものは少なく、泰山もしくは府君という名称が見られるものは四話、天という名称が見られるものは三話に過ぎない。以下、話を要約したものがそれである。

◎晋の趙泰(清河郡貝丘県の人)が死んで冥界に行き、

府君の取調を受けて、福舎と地獄を巡ってから生き返る。【府君西向坐】（『冥祥記』4）

◎晋の孫稚（般陽県の人、父はその後武昌に移住）が死んで生き返り、「外祖父が泰山府君となっており、今自分は福堂にいる。自分はもうすぐ国王の家に生まれ変わり、仲間が第六天に生まれ変わる」と語る。【説其外祖父為太山府君】（『冥祥記』25）

◎宋の陳安居（襄陽の人）が死んで冥界に連れて行かれるが、仏に帰依し大徳ある人物であるため、府君のはからいによって生き返る。【府君無教】（『冥祥記』64）

◎宋の李旦（広陵の人）が府君によって冥界に呼ばれ、世に知らさせるためといって、地獄を見せられ、生き返る。【称府君教喚】（『冥祥記』76）

◎晋の史世光（襄陽の人）が武昌で死ぬ。世光は霊として現われ、世光の家の婢であった張信に、自分は支和尚のおかげで第七梵天に上ほることができたと告げる。そして自分が生前寄進した二つの幡を張にとつてこさせ、天の門に入っていく。その時六歳になる子が、祖母に「父さんが飛んで天に上ほって行く。おぼあさん見えますか」という。【阿爺飛上天】（『冥祥記』21）

◎宋の司馬文宣（河内の人）の弟は亡くなる。弟が鬼となってあらわれ、飲食を求め。その夜、文宣の夢

にまた弟が現われ、自分は天に生まれ変わり、昼間現われた鬼は自分ではないことを告げる。【応得生天】（『冥祥記』80）

◎宋の蔣小徳（江陵の人、兵州刺史）が病で死ぬ。死んで王に召されて「天帝があなたの仏法を奉じることの厚いことから、すみやかに善き地に生まれ変わるようにとのことである。あなたはこれから天中の快樂を受けられるのだ」と告げられる。【君今日将受天中快樂欣然】（『冥祥記』109）

今、ここに挙げた七話に関して、最初の四話が泰山にふれたもの、後の三話が、天にふれたものである。『冥祥記』のこの泰山と天の分布を地図上に表わしてみると、図2のようになる。この分布から、『冥祥記』において泰山の名称は淮水を越えた南の地方に多く見ることができ、天の分布は北と南に関係なく広がっていることがわかる。

さらに、泰山に関しては、その冥界が泰山にあると明確に書かれているものは、一例もない。上の四話に共通して、泰山府君もしくは府君という役職名で表記されるのみである。つまり『冥祥記』以前の説話集、『搜神記』などに見られた死者が泰山へ赴くというモチーフの上で泰山という名称が使われるのではなく、泰山府君という役職名でのみ登場するのである。

一方の天は、どうであろうか。『冥祥記』以前の天は次の

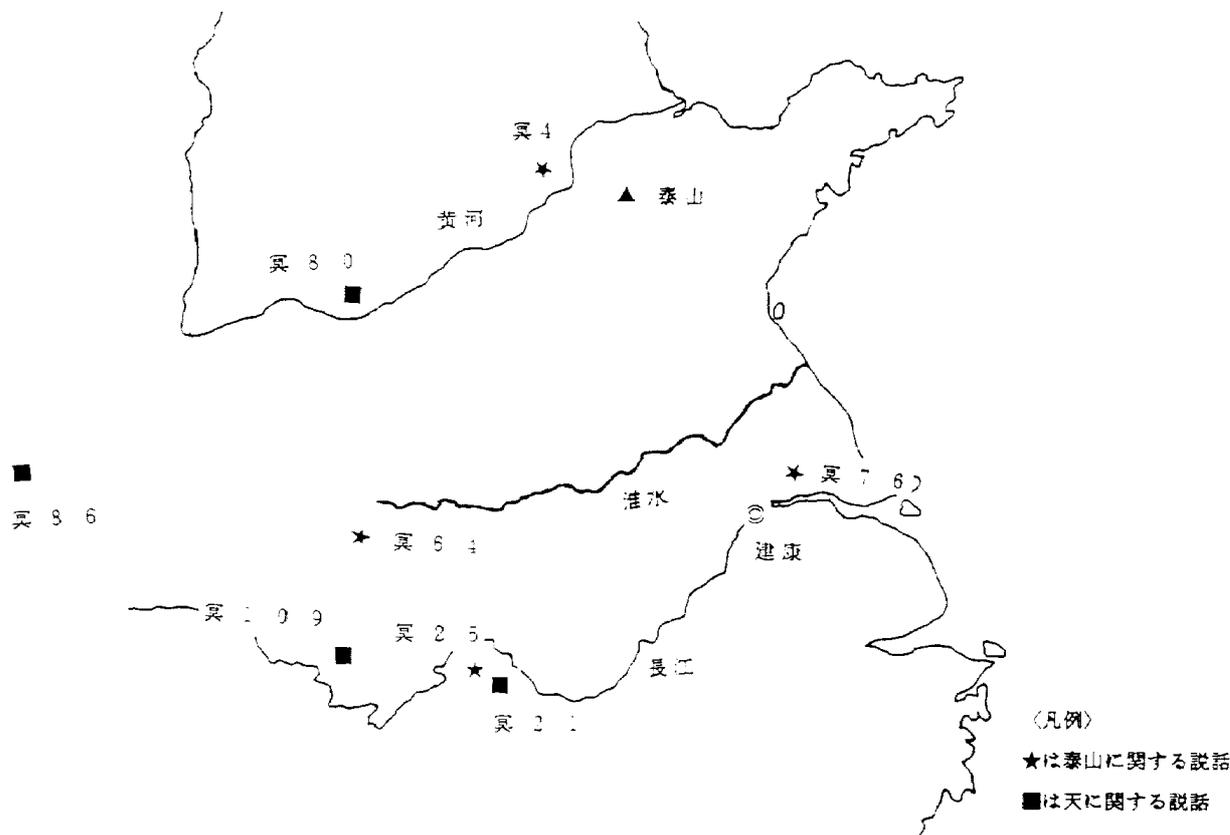


図2 冥祥記における死後の世界の分布

ような描写で表現された。

吏人將上天、見官府（吏人 將ゐて天に上ぼり、官府を見る）（『搜神記』364）

死時、天使其為酒藏吏、授符録、給吏從幡麾、將上蓬萊、崑崙、積石、太室、廬、衡等山。（死する時、天

其れをして酒藏吏と為ら使め、符録を授け、吏を給ひ幡麾を從へ、將ゐて蓬萊、崑崙、積石、太室、廬、衡等の山に上る。）（『搜神記』365）

それが『冥祥記』では、

世光与信、於家去時、其六歳兒見之、指語祖母曰、「阿爺飛上天、婆為見不。」（世光 信と、家を去りし時、其の六歳の兒 之を見、指して祖母に語りて曰く、「阿爺飛びて天に上ぼる、婆見ることを為すやいなや」と。）（『冥祥記』21）

と描写している。死者は飛んで天に上っていて、その描写は従来のような表現と酷似している。

蔡謨在厅事上坐、忽聞隣左復魄声、乃出庭前望、正見新死之家、有一老嫗、上著黄羅半袖、下著縹裙、飄然升天、聞一喚声、輒回顧、三喚三顧、徘徊良久、声既絶、亦不復見。問喪家、云亡者衣服如此。（蔡謨厅事の上にて坐す。忽ち隣左に復魄の声を聞く。乃ち庭前に出でて望めば、正に新たに死するの家に、一老嫗有り、上に黄羅の半袖を著け、下に縹裙を著け、飄然

として天に升るを見る。一たび喚声を聞けば、輒ち回顧し、三たび喚べば三たび顧み、徘徊すること良や久しくして、声 既に絶えれば、亦た復た見ず。喪家に問へば、亡者の衣服此くの如しと云ふ。(『幽明録』77)

このように、『冥祥記』における天の描写には、従来と同様の表現が使われている。それでは、『冥祥記』に描かれる天は、それ以前に描かれた天と同様の性質を持つものなのであろうか。先の『冥祥記』21の描写の前に次のような表現がある。

我本応墮龍中、支和尚為我転経、曇護曇堅迎我上第七梵天快樂処矣(我本応に龍中に墮つべきに、支和尚我が為に経を転じ、曇護・曇堅我を迎へて第七梵天快樂の処に上ぼらしむ)(『冥祥記』21)

ここで描かれる天は、従来の天とは異なり、明らかに仏教の三界としての天である。このことから、『冥祥記』における天は、従来の表現を説話の中に取り込みながら、そこに仏教の要素を織り込んでいったと言える。そして、天そのものを、仏教の考える天に変質させていった。これほどはつきりとは書かれてはいないが、次のような表現からも、仏教の影響を見て取ることができるだろう。

汝平生時修行十善、若如経言、応得生天。(汝平生の時十善を修行す、若し経言の如くあれば、応に天に生ま

るを得べし)(『冥祥記』80)

また、このように仏教という中国全土に広がりを見せる信仰をもとに描かれた天は、従来のような地方性というものはそこに持ち合わせていない。

以上見てきたように、『冥祥記』にいたって、そこに描かれる泰山と天は、仏教の影響のもと、大きく変化をとげ、従来見られていた地方的特徴を失っていくのである。

四 死後と墓

前章まで、死後の行き先として、泰山と墓を中心に考察を加えてきた。最後に、墓に関して、考察を加えたい。

死者を埋葬する墓を描いた説話は、志怪小説集において、非常に数多い。しかし、墓そのものに別世界を構築するものはほとんどない。単に、墓における怪異を語る素朴な伝承と思われるものがほとんどである。『捜神記』『捜神後記』『幽明録』『異苑』という、代表的な説話集の中から、墓を描いた説話の地理的分布を図示したものが、図3である。

この分布をみてもわかるように、墓に関して言うならば、そこに地理的特徴というものを見出すことはできない。全中国に、墓の説話は広がっている。墓を舞台とした説話は、埋葬の習俗から生じてきたものであり、墓に死者を埋葬する習俗は、全中国的なものであるということから、こ

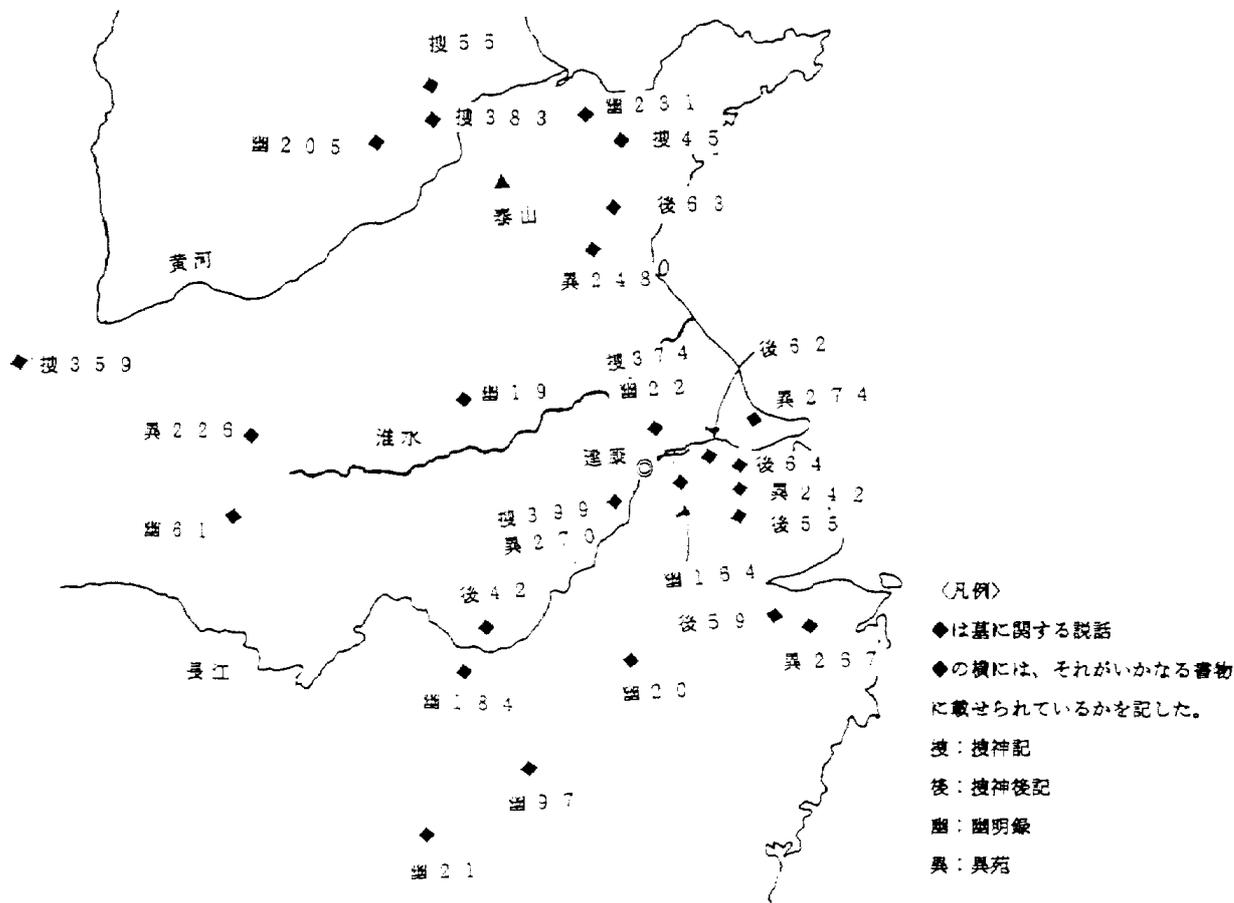


図3 墓を扱った説話の分布

の点は説明ができるであろう。

ただ、墓が死者の生活する別世界であるということがうかがえる説話も存在する。代表的なものは、一般に幽婚譚と称されるものである。旅人が、途中一夜の宿を借りる。そこには女性が暮らしている。(もちろん男性の時もある。)

翌朝目覚めるとその場所は墓であった、というような話である。このような話では、死者が墓の中で生活をしている様子うかがえる。そして、そこには墓を中心とした世界があったようである。例えば次のような説話である。

◎漢の時會稽郡句章の人が日が暮れても家に帰りつけず、かたわらの火をともしていた小屋に泊まった。そこには一人の少女がいたが、男といっしょにいるのを望まなかったため、隣家の女を連れてきた。彼女は、姓は陳名は阿登と歌う。翌朝、食べ物を売っていた女性にこのことを話すと、それは私の娘で、最近死んだので城外に葬ったのです、と言った。(『搜神後記』53)

この説話においては、隣家の女性の存在が見てとれる。つまり、墓の中で一人の女性がただ暮らしているのではなく、他の墓に住む女性との交渉があったことがわかるであろう。しかし、泰山や天にあったような明確な社会構成であったかどうかまでは、踏み込んで語られてはいない。さらに次のような話も存在する。

◎永和の頃、義興の出身の周という人物が、二人を伴に旅をしていた。途中日が暮れて、女性の住んでいる小屋に一夜の宿を借りる。彼女は周のために火をたき食事の支度をしてくれた。夜更けに、家の外に彼女を呼ぶ声が出て、彼女に役人が雷車を押すことを求めていると告げる。彼女は出かけていったが、その夜は非常な雷雨であった。翌朝出発した周が、昨晩泊まった場所をみると、新しい塚であった。〔『搜神後記』

55)

この説話では、宿を借してくれた女性が、役人に呼ばれて雷車を押しに出かけていってしまう。この話は舞台が淮水以南であるため、恐らくは天の役人からの命であったと思われる。ここでは、天と墓とがつながっていることがうかがえる。

しかし、このような例はこれ以外に見出だすことはできず、墓と冥界をつなげて構築される物語は、これ以降も展開をみせない。『冥祥記』にいたっては、墓を描いた説話は一例も存在しないのである。素朴な考え方であった墓を中心とした冥界観は、天や泰山と結びついて一つの世界を構築することはできず、さらには仏教の影響下にある説話においてはほとんど語られることがなくなっていくのである。

おわりに

前野直彬氏は、六朝より前の死後の世界について、
1 人間が死ねば、魂は肉体とともに地下に入る。
2 人間が死ねば、肉体は地下に入り、魂は天へ昇る。
3 人間が死ねば、魂は蒿里へ連れ去られる。

という三つの考え方があったとされ、3は1の発展したものの、1と2の間には時間的先後関係はつけにくい、と述べられる。さらに、「魏晋のころ、志怪と総称される小説類が生み出されるようになったとき、これらの諸観念がなお雑然として共存していたらしく見える」と指摘される。

しかし、前章までに見てきたように、その舞台となる地名に注目し分類整理をおこなうと、死後の世界はさまざまなかえ方が雑然とあったのではなく、地方によって違う世界が存在していた、と考えられるのではないか。つまり、死後の行き先として、淮水を挟んで北では泰山が、南では天が、それぞれ考えられていたのである。これは、六朝以前の『楚辞』や馬王堆漢墓出土の考古学資料よりも明らかのように、長い歴史を持つ考え方であったようである。

しかし、人の移動や仏教の盛行にともない、泰山を中心とした北の考え方が南へと流入し混淆をはじめるのである。一方、天や泰山の考え方と並立した形で、墓も死後の行き先として考えられていたが、その分布は全中国的なもので

あった。そして六朝末になると、天と泰山の二つの考え方は、仏教の中に取り込まれ、従来の特徴は失われていく。墓に関していうならば、仏教説話の中では語られなくなっているのである。

本論文では、六朝の志怪小説という非常に限られたジャンルの中で、該当の説話を抜き出して考察を加えたもので、話の例は数的にもそれほど多いとはいえない。しかし、当時の民間伝承を色濃く残す志怪小説集を、このような形で分析するのは意味有るものと考ええる。また、従来雑然として多岐にわたっているように思われてきた死を描いた説話について、地方性というものに着目することによって、一つの新しい視座が生まれてきたと思われる。つまり、六朝頃までは、死に対して少なくとも二つの異なる文化圏が、淮水を挟んで存在していたと考えることができるのである。それが、時代の変遷にともなって、混淆をしていく。その変化の様子が、志怪小説という題材を通して読みとれるであろう。これは、なかなか見えてきにくい、中国文化の地方性を説話を通して読み解く一つの試みとして、意味あるものであると考える。

(注)

- ① 張軍『楚国神話原型研究』（文律出版社 一九九四年）
② 曾布川寛『崑崙山への昇仙』（中公新書 一九八一年）

この中で曾布川氏は次のように述べる。

さて、これら昇仙図の内容を検討すると、当時の人々の考えた昇仙の具体的形式が知れる。時代、地域に応じて変化があるが、基本的には人間が死ぬとその死者のもとへ、天上の天帝から使者が遣わされ、崑崙山からも迎える神が降り、ここに死者は乗り物にのって崑崙山へと昇仙するという点で一致する。

- ③ 前野直彬「冥界游行」(『中国文学報』第十四・十五輯 一九六一年)。この他にも、中野美代子「中国人における死と冥界―地獄をデザインするまで―」「古代中国人の「あの世」観―地獄の地理学」(ともに『ひょうたん漫遊録』朝日新聞社 一九九一年所収)、富永一登「六朝志怪に見える鬼について」(宇部工業高等専門学校研究報告 27号 一九八一年)、秋田成明「六朝志怪にあらわれた霊異観念」(甲南大学紀要文学部25 一九七七年)などがある。また竹田晃「中国の幽霊」(東京大学出版会 一九八〇年)の中にも言及がある。

- ④ この数字は、魯迅輯『古小説鈞沈』所収『列異伝』の話に通し番号をつけたもの。以下『古小説鈞沈』所収の志怪書の番号も同じ。『古小説鈞沈』のテキストとしては、魯迅三十年集六・七(新芸出版社 一九六七年)を使用し、魯迅全集第八卷(人民文学出版社 一九七三年)、各種類書を随時参照した。

- ⑤ この数字は、『搜神記』の話に通し番号をつけたもの。テキストとしては、汪紹楹校注本（中華書局 一九七九年）を使用した。
- ⑥ ここには、泰山という名称が見られるものだけを挙げた。
- ⑦ この数字は『搜神後記』の話に通し番号をつけたものである。テキストとして汪紹楹校注本（中華書局 一九八一年）を使用した。
- ⑧ 北中郎将府索盧貞は、もと荀羨の官吏であった。荀羨は、京口に駐屯していたことから、ここでは京口を舞台と考える。
- ⑨ この数字は『異苑』の話の通し番号である。テキストとしては学津討原本を使用した。
- ⑩ これと同話が『異苑』321におさめられており、そこでは「臨海楽安章沈」とある。
- ⑪ 沢田瑞穂『地獄変』（平河出版社 一九九一年）などに詳しい。
- ⑫ 『幽明録』247・『冥祥記』4
- ⑬ 原文「帝」。今、「天帝」と解釈する。
- ⑭ 仏教においては、人は死ねば「成仏」するか「輪廻転生」するかの基本的には二つである。このような考え方のもとでは、墓はやはり重要なモチーフとなり得なかつたと思われる。基本的に仏教と墓とは関係ないのである。

- ⑮ これに関して、加地伸行氏は「儒教とは何か」（中公新書 一九九四年）などの論考で詳しく述べられている。
前野直彬前掲書